

ゆじょうはん

情勢判断学会 東京本部
 会員向けニューズレター
 発行人 古川 彰久
 事務局 〒252-0321 神奈川県
 相模原市南区相模台1-23-9
 Tel.&Fax.
 042-748-8240
<http://www.jouhan.com>
 E-mail:info@iki2life.com

1月例会ご案内

日時 : 1月12日 木曜日
 18:30 ~ 20:30
 場所 : 港区立産業振興センター
 10階 会議室3
 会費 : 1000円
 テーマ : 「東西古今人間学3」前編
 テープを聴く
 演者 : 石田 金次郎

古今東西の人間学では、信長の科学的計算性を学んだ。次いでナポレオンと秀吉に見る科学的計算性の項ではナポレオンの戦略と戦術並びにナポレオンの失敗した戦略・戦術を学んだ。

今回はカセット3Dでは秀吉に見る科学的計算性である。秀吉の時間に着目した時間差攻撃の迅速な戦法と時間を掛けて相手を滅ぼす戦法の2つを、天下統一の為には戦力の損耗を最小にする戦略の観点から、使い分けている秀吉の科学的計算を紹介している。

時間差攻撃では、賤ヶ岳合戦を取り上げている。信長亡き後、柴田勝家と秀吉が跡目を争う。柴田勝家は信長が上杉への抑えとして福井に据えた。兵力は秀吉3万、柴田2.7万とほぼ同じ位である。秀吉が勝つには、柴田の兵力が分断されるときだと常にその時を狙っていた。柴田勝家の部下の佐久間玄蕃盛政が、山を越えて秀吉の傘下の武将中川清秀を破り、賤ヶ岳に進出した。秀吉は、相手が勝ってこっちが負けた時に、シメタと思った。秀吉は相手の半分の兵力が賤ヶ岳だと判断し今だと、秀吉の居た大垣城から52kmの賤ヶ岳まで、通常であれば3日かかるところを5時間で全軍3万を移動し、準備の整わない佐久間の軍を敗走させて、北之庄にいる柴田勝家を自刃に追い込んで滅ぼした。この間、柴田勝家の武将であった前田利家なども傘下に加え、徳川家康等有力な人材に対しても心を砕いていた。

これは、昔の話しであるが、常に勝機を覗き負け戦でも手を打って勝ち戦にする脳細胞のソフトウェアの参考例として、今でも実業・生活に役に立つものと思う。

時間を掛けて相手を滅ぼしたケースとして、三木城攻略に2年1ヶ月やら小田原攻め1年などと

紹介している。

次に、カセット4Aである。時間差攻撃第2弾。光秀との戦いである。秀吉は高松城攻撃中であった。本能寺で信長が殺されたと聞いて、毛利と1日で講和をはかり、姫路城に戻る。戻るにあたり、鎧・兜等は捨てて早く走るよう指示し、姫路城に戻ったら毛利作戦に用意してあった戦闘資材で新装備して、予定より3倍半ぐらい早く光秀の居る山崎に移動し、光秀側の武将であった、細川忠興や高山右近らを味方に組み入れ、準備の出来ない光秀を敗走させた。時間をどう使うかは戦術問題であり、時間差を有利に使った。

次は、時間を掛けて相手を滅ぼす戦法である。毛利方の別所氏の三木城の攻略は城を包囲して、食糧攻めで2カ年かかって落城させた。毛利方吉川氏の鳥取城の場合は、は7月から10月の4ヶ月である。飢餓攻めである。鳥取城の在庫米を商人が2倍の値段で買いとり、在庫米が無くなったときに、秀吉が攻めた。4ヶ月後に鳥取城は飢餓による落城である。

次いで毛利方清水氏の高松城の水攻めである。平野の中の城であるが、周囲は湿地であり、攻めにくい。そこで、水を武器とするために上流の川をせき止め2倍の労賃で堤を作った。が、堤を崩すと一気に水が溢れ、水の中に埋まる城となった。城主清水氏は自刃で落城する。そして、最後の城攻め、小田原城である。海陸とも包囲し、北条の籠城作戦に対して、秀吉側も退屈しない環境を整備し、落城を待つ。やがて小田原城内の内紛や家臣の寝返りで落城する。以上挙げてきたが戦闘はしていない。秀吉の面目躍如である。いろいろな条件を考え抜いて、持っている物資動員力、条件の整備に抜かりなく、相手を落城させている。科学的計算性という真骨頂である。

最後にカセット4Bである。

小田原攻めで、北条の籠城作戦に対抗し、包囲している秀吉方も人間の心理状態をリラックスする対応、例えば京都から女郎を呼んだり妻子を呼んだりして小さな町が出現したような環境を許したのは、秀吉ならではである。

人間学は昔の人たちの成功を見て、どういうソフトウェア、或いは脳のプログラムだったのかを掴み、これを学ぶことにある。仕事を上手くやるには、相手がどういうソフトウェア、プログラムなのか、こちらがどういうソフトウェア、プログ

ラムなのか、が分かって始めてうまくいくものだ。

北海道庁に招聘されて、工業視察団として行ったおりの話で、物を見に来たわけではなく、どんなソフトウェアでやっているのかが知りたいことだった。が、道庁からは何か付加価値の高い内地の工業誘致をしきりと言っていたが、その戦略は間違ったソフトウェアであると遠隔にもうしあげた。内地の工場誘致でなくて、自分で新しい事業を作り出すことが大切なのだと申し上げた。

夕張に行くと大変頑張っていると感じた。一つは夕張メロンだけでなく、リキュールやブランデーなど新しい事業を立ち上げていたこと、又、炭鉱あとをレジャーランドなど立ち上げ、起債したお金も一年で元が取れるようなことであった。夕張はそれまで炭鉱であったために、地下にのみ投資をしてきた云々あったが、それは地上では何でもやる時に制約が少なく、そのため何でも出来るという利点でもある。つまり一番不利な条件は、一番有利な条件でもある。

人間学に戻って、尼子氏の上月城をどうすべきか、秀吉は信長に戦略上の決定を伺い、これを切り捨てることを信長は決定をした。これは明智光秀とは違うところで、戦略と戦術の判断が、秀吉の場合は明確であった。

1 1 月例会報告

日時 : 11月10日 木曜日
18:30 ~ 20:30
場所 : 港区立産業振興センター
10階 会議室3
テーマ : 「東西古今人間学2」前編
テープを聴く
演者 : 塩澤 貴良

【科学的計算性】

テープ前編

信長は2方面作戦はやらない。

戦略「斉藤と和す」「家康を育て東を守る」

「武田信玄と戦わず、中部を抑える」

奇襲は桶狭間の一度きりであった。姉川の合戦後も追撃戦はやらず、的的内部崩壊を待つ。信長の条件は親譲りの過信なし。部下を抜擢できた。反対に武田は出来なかった。長篠の戦いで取った戦略は「武田を練りヒバリにする」。戦術は①杭1本と縄を持っていく。②障害物を構築し、騎馬の突撃を防ぐ③鉄砲を集めて連続して射撃（当時の弱点を消す）

勝頼の性格、家臣をまとめる必要性などを考慮し、信長は待ち受けた。勝頼は違った戦術がとれなかった。

出席者の意見

神前氏「科学的計算性とは勝つ条件を揃えること」との意見がでた。また戦略として古川氏から「武田の戦略は天下統一でない」という意見や、石田氏からは戦略のぶつかり合いとして、自由主義VS共産主義の話が出た。また「阿部首相のクワッドも戦略の1つである。」と塩澤が言ったところ、古川氏より、「クワッドもアメリカの戦略に沿ったものという、思いがけない意見も出た。コロナに対しスエーデンの「ロックダウンはしない」なども戦略であるとの意見もでた。

テープ後編

科学的計算性の続き

100m走る間に3発から4発当たる。減少率は大きくなり、1/3~1/4となる。障害物隊列を組んでやる。これは処刑場と同じ。火縄銃をまとめて使うことは300年前にガットリンクリンカイ砲と同じ。条件として堺を支配した。さらに技術を国友村に持ち込み刀鍛冶に作らせた。製鉄、火薬を調達する。すべて科学的計算性があったことである。

さらに、信長の人間性にもふれた。部下とのつながりがなければ桶狭間のような9倍の敵と戦は出来ない。証拠として秀吉の妻おねねと信長のやりとりが手紙として残っている。浮気の多い秀吉を叱ってくださいと訴えるおねねに対し、信長は

「あのはげネズミ、おまえというものがいながらけしからんと」おねねを褒め、さらに「しかしあまりやきもちを焼くな」と見事に諭している。家柄に関係なく部下の妻から社長に対して相談が来た。

出席者意見

石田氏よりルイスフロイスが書き残した信長の性格についてのコメントがあった。信長は合理的な思考で正義に対し強い意志を持っていた。黒人奴隷ヤスケも侍に取り立てた。広い見識を持っていた。

松本氏「信長は現代のベンチャー企業で、意見を聞くので社員がまとまったのではないか」とのことを述べた。それに対し大企業は失敗を恐れる。前例あるかどうか重要になっている。

信長に人がついてきたのは戦略があったから。古川氏「城野さんも人間関係に入っていくのがうまかった」。古川氏「日本は短期決戦、長期的に物事を考えられない。」

神前氏「信長はスピードが速い。」「相手をじわじわ攻めてプレッシャーをかけてミスを待つ。」

信長は戦略があり、科学的計算性があり、人間関係を築くのがうまかった。

現代の名経営者にも当てはまる脳力だと確信した。

